



いのうえ ただし
 絵・井上 忠司

愛知県生れ。文化学院デザイン科卒業後、グラフィックデザインの世界へ。食品関係・洗剤関係の仕事を経てパッケージのアートディレクター（AD）になる。リタイア後に趣味で始めたバードウォッチングにはまり、10年間鳥の絵を描いてきました。さんしょうのご利用者です。

夏まつり！ 第10回地域交流カフェ

●日時 8月22日(火)、12時～3時

●場所 さんしょうリビング

焼きそば、かき氷、綿あめ、ところてん、すいか割り…

内中偉雄さんの「からくり人形」上演

参加自由、ぜひご参加ください。



地域の歴史を発掘し、多彩な物づくり能力で地域に貢献する

うちなかひでお

内中偉雄さんにインタビュー



河原塚在住の内中偉雄さん(74)は、昨年12月に完成し出版した『わが街河原塚 いまと昔の物語』(写真左)の編纂事業で、中心的な役割をされました。地域の歴史を調べてまとめるという、「文系」の仕事ですが、物づくりにおいても、楽器の琵琶やからくり人形、さらには熊野神社の菅原道真公のお社までつくりました。どうしてそういうのができるのか、詳しく聞きました。

——河原塚の地域史編纂事業では、企画から調査、執筆と、ほとんど内中さんがやられたそうですが、大変だったでしょう。

内中 やろうと言いだしたのが私ですから…。仕事がジャーナリストで、毎日いろいろ調べたりインタビューして原稿を書いていたので、慣れていまして、難しいことではないですよ。毎月の町会回覧が36回で3年間、準備も含めて4年がかりというのは最初からわかっていて、そういう覚悟で臨みました。

——どうしてそれをやろうとなったのですか。

内中 私が河原塚南山自治会の会長をしていたとき、熊野神社のお祭りに町会として参加のお誘いを受けて参加したのがきっかけで、氏子の仲間入りをさせていただきました。地主さんたちとの飲み会がぐっと増えて、いつも河原塚の昔のことが話題になるわけです。それを「いまのうちに記録に残しておこうよ。みなさんが話してくれれば、文章は私がまとめるから」といって、3年ぐらいかかってやろうとなったわけです。

——氏子の飲み会からあの本ができていったのですか。すごいですね。

内中 和歌山県出身の私が河原塚に引っ越してきたのはいまから37年前です。すでに宅地開発がかなりすすんでいて、小学校も中学校もできていました。春木川が清流でタナゴがいた、ホテルもいたという話は新鮮です。周りにも地方出身の方がたくさんいるので、その人たちに伝え、そして記録に残して末永く後世に伝えていきたいと思ったわけです。ただ、そういう話は河原塚だけのことでなく、松



内中偉雄さんとからくり人形

戸市内どこでも同じです。どの地域でも歴史はあるが、ややもすると消えかかろうとしている。ほかの地域でも、いまのうちにぜひ挑戦してほしいですね。河原塚では今回、わかることをすべて記録に残しましたが、歴史の専門家がいたわけではないです。町会長4人を含む14人の編纂委員は、全員が専門家ではありません。それでも努力すれば、この程度のことはできるわけです。

——調べていくなかで、いくつもの大きな発見があったそうですね。

内中 3万年前から人が暮らしていたとか、江戸時代の領主が新見(しんみ)さんという旗本だったとか、熊野神社の末社に菅原道真公の祭神があるとか、地主さんも知らないことがたくさん分かりました。努力すれば新しい発見がある。だからやっていて楽しかったですよ。

——菅原道真公の社は、その発見があって造られたのですか。

内中 道真公の祭神発見は編纂委員会の仕事ですが、せっかくすごいのを発見したのだから、それをどう祀るか、今度は氏子の出番です。総代さんたちが「実在した有名な神様にふさわしい祀り方をしよう」となったわけです。そこで社は私が造りましょうと手を上げた。編纂委員ではなく氏子としてです。買ったから大変ですから。

——簡単に言いますが、そんなに簡単にできるのですか。

内中 簡単にはできません。小さくとも、釘は1

本も使わず、本格的な神社と同じ木組みで造っていますから。組んでしまえばバラけないように、見えないところでも中で複雑な木組みをしています。設計も含めて半年かかりました。

——昔、そういうお仕事をしていたという訳ではないでしょう。

内中 35年ほど前に、八柱学童保育所の子ども神輿を作ったわけです。お父さんたちと一緒に。それ以来社寺建築に興味を持って、神社やお寺の造り方を勉強してきました。造れるという見通しがあったわけです。

熊野神社の本殿を造った宮大工といまでも懇意にしている、道真公の社造りの話をしたら、「内中さんならできるから、やってみな」といって、背中を押してくれました。



菅原道真公の社（熊野神社）

——お社のことはわかりました。ほかにも楽器の琵琶やからくり人形も作っていらっしゃるそうですね。

内中 12年前に退職して、まず作ったのは琵琶の撥（ばち）です。そして筑前琵琶、そのあと4年前にからくり人形ですね。お茶を運ぶ。それまでも子ども神輿や料理舟、竹の釣り竿などを作っていましたが、物作り人生の集大成として、難しいからくり人形に挑戦しようと、退職前から計画し、準備してきました。撥とか琵琶作りが入って、なかなかできず、やっと作りましたが、予想したほど難しくはなかったわけです。これで物作りの集大成とはいかないと思っていたら、社造りがあって、これはやりがいのある作業でした。

——料理の舟も作っているのですか。

内中 釣ったタイを姿造りにして舟に盛り付けようとね。東京のかっぱ橋道具街へ見に行ったら、どれもこれもおもちゃですよ。こんなのに自分で釣ったタイを盛るわけにはいけないと思って、和舟と同じデザインで作ったわけです。4キロぐらいのタイでも乗りますよ。

——大きいタイを釣ったら、ぜひ「さんしょう」で舟盛りにして振舞ってほしいですね。

内中 いま御宿沖でタイがよく釣れていますから、大丈夫でしょう。

——それに、からくり人形も披露してほしいし、河原塚史をまとめた話も、講演してほしいと思います。

内中 また忙しくなりますね。

（聞き手 中野三代子）

『わが街河原塚 いまと昔の物語』は千葉日報社で発行し、書店で発売しています）



インタビュー後、内中さんは約束通り5kg超の大鯛を釣り上げ、さんしょうの利用者に舟盛りをご馳走してくださいました。ありがとうございました。



ツバメが巣立ちました！

6月になった頃、幸樹会館のピロティーヤや庇の辺りをうかがうように、ツバメが飛び回っていました。もしかして巣作りする場所を探している…？ 選ばれた場所は職員玄関の脇。ちょうど空調の排気口の上で、風雨の当たらない場所です。なるほど！ここならヒナが生まれても落ちる心配がないですね、感心。幸樹会の職員みんなで『新規ご利用者様』として迎え入れ、ケアステーションゆずのブログでも紹介させていただきました。



職員玄関を出入りするたびに「巣がおおきくなりましたね」「タマゴがうまれた？」「ヒナがかえった？」「3羽いるね」「んん？4羽いるよ！」「キャー！私の傘にウ〇チが！」など毎朝の話題になりました。

「ツバメが巣を作ると幸せになる」というそうです。渡り鳥のツバメは居心地のよい場所・環境を察する能力が高いとされ、「安心安全な場所として認められた」という意味で「幸せ」というのでしょうか。幸樹会館も間もなく一年が過ぎようとしています。この間、地域の方・ご利用いただいた方に「安心・安全な場所」として認められたと信じています。7月20日、4羽は無事巣立ちました。ツバメさん！来年のご利用をお待ちしております。（ケアステーションゆず副所長・浅尾いずみ）



あんず畑

枝豆収穫祭



7月22日(土)、枝豆収穫祭が行われました。さんしょうの利用者さんや、職員・家族、三和病院の待合室に置かれた『幸樹』を読んで参加された患者・家族の皆さんなどが集まって、あんず畑がとても賑やかに。

枝豆はケアステーションゆずの職員が訪問の合間に草取りなどの手入れをし、天候にも恵まれ、今年はよく育ちました。畑では子供たちが走りまわり、大はしゃぎ。



三姉妹!?

畑の持ち主の吉岡さんのご好意で、プチトマトやブルーベリーも収穫させていただきました。「ブルーベリーってこういう樹に生っているんだ!」と初めて見た子供たちは大興奮、よい経験になりました。

畑でお昼ご飯(カレー)・デザート(スイカ)も予定されていましたが、日中の気温は34度になり、暑い日でしたので、看多機さんしょうのリビングに移動、さんしょうで待っていた利用者さんと一緒のお昼は、賑やかな大家族のようで、楽しかったです。子供たち



ブルーベリー摘みは大人気

のカレーおかわりも、前日から仕込みをして頑張ったゆずの職員は嬉しかったようです。暑かったけれど、心地良い疲れの楽しい一日となりました。

清水さんの蕎麦打ち



ご利用者の清水榮一さん(写真左)は、お仕事が粉問屋。そば粉も扱っていたため、趣味で蕎麦打ちをはじめ、施設等で蕎麦打ち実演や教室を開いてきたそうです。さんしょうでも早速腕前をご披露いただきました。料理も得意で、よく天ぷらをあげてください、利用者の皆さんを喜ばせてくれています。

八柱学習会(定期勉強会)

●前回報告7月21日(金)。助言者 武井幸穂氏
テーマ: 看取りケア⑥

『一日一日を生きる一須加幸正遺稿集』から

参加者15名。この本は、武井さんの友人で1月に亡くなられた須加幸正さんが亡くなる前の約1年間に妻と子供たちへ感謝と伝えたい想いを大学ノート2冊に書き綴った遺稿を自費出版したものです。

末期の副鼻腔がんを宣告され、結局在宅緩和ケアを選択し、「がんとは闘わない。明るく、がん末期を生きる」と決意をした須加さんの「入舞」ともいうべき日々が伺われて感動的です。「絶筆の『あなたの夫となれるようがんばりました』という言葉が素敵、すばらしい夫婦関係を想像させます」、「子供たちへのメッセージを、新聞等の記事と本人の数行のコメントで伝えるという方法がとても斬新、両方が響きあって取り上げた事項の本質がより鋭く浮き上がってくるようです」等の感想がありました。

●次回学習会予定(定例日: 毎月第3金曜日)
日時: 8月18日(金) 18:30~19:30

テーマ: 看取りケア⑦

日野原重明『生き方教室』から

* 場所: 幸樹会館2階 * 参加自由



今月の屋上太陽光発電量は...

1,404 kWh

幸樹会館電力使用量 4154kwh 自給率 33.8%